

ISSN 2186 – 3989

外国学会発表報告

The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum

2024年5月6日（土）プリンストン（アメリカ）

国際交流センター 横田 隆志

北 陸 大 学 紀 要
第58号(2025年3月)抜刷

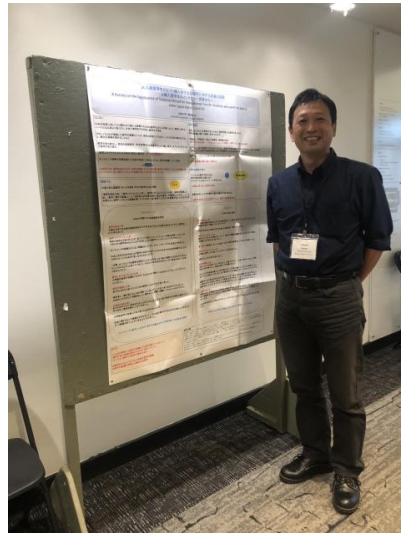
外国学会発表報告

The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum

2024 年 5 月 6 日 (土) プリンストン (アメリカ)

国際交流センター 横田 隆志

発表題目：未入国留学生となった編入留学生の留学に対する意義の調査
ー元編入留学生のインタビュー調査からー



2024 年 5 月 4 日にアメリカ・プリンストン大学で開催された The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum に参加した。今回のフォーラムは、記念大会となる 30 周年の大会であり、テーマは「今改めて留学を考える」であった。コロナ禍をきっかけに留学の方法や意義の変化が見られるようになり、今回のフォーラムでは、「留学」について改めて考察することが目的だった。

基調講演では、関西学院大学のテヤ オストハイダ氏による「留学と『共通語としての日本語』」というタイトルで講演が行われた。講演では、テヤ オストハイダ氏の留学の経験や社会言語学の観点からの日本での「マイノリティ」に対するコミュニケーションについての話を聞くことができた。留学は、根強い自文化中心主義とその背景にある、「違い」を強調しがちな異文化理解教育を問いなおす好機であり、その重要性について述べていた。また、留学経験を踏まえながら、「共通語としての日本語」に焦点を当て、「意識」「政策」「実態」という 3 つの観点から日本語でのコミュニケーションについての問題についても述べられた。すでに多民族・多言語社会である日本では、多様性を尊重しながらコミュニケーションをはかる能力を養うことの重要性やそのためのことばの教育の役割について考えることができた。

そして、アメリカから日本への留学プログラムについて、Hokkaido International Foundation (HIF)、

Inter-University Center for Japanese Language Studies (IUC)、Kyoto Consortium for Japanese Studies (KCJS)、Princeton in Ishikawa (PII) の4つのプログラムの代表によるパネルディスカッションも行われた。パネルディスカッションでは、これまでのプログラムの概要、問題点などについてそれぞれのパネラーによる発表があった。発表での「多様なバックグラウンドを持つ学生への支援について」では、日本での「あたりまえ」がアメリカでの「あたりまえ」ではなく、日本での留学プログラムで問題になりそうなことについて話を聞くことができた。このようなプログラムの運営に関する話は、姉妹校とのサマーコースを実施している北陸大学でも今後は考えなくてはならないことであることを再認識させられた。

また、基調講演とパネスディスカッション以外にも、16の口頭発表と6つポスター発表があり、それぞれの発表は興味深いものであった。

今回は「未入国留学生となった編入留学生の留学に対する意義の調査 ―元編入留学生のインタビュー調査から―」というタイトルでポスター発表をした。本調査は、コロナ禍において来日することができなくなった編入留学はどのような思いでオンラインの授業を受講していたのかという観点から留学について再考する研究であった。編入留学生は2年間という短い時間での留学であり、来日できないことで留学をあきらめた学生も多くいた。しかし、コロナによってさらに短い時間での留学となったにもかかわらず、留学をあきらめずに来日した学生もいる。このような留学生にとって短い期間での留学はどのような意義があったのかを調査した。編入留学生は留学にどのような意義を感じていたのか、短い留学にどのような意義があったのかをインタビュー調査の分析から明らかにした。留学を決めた時、留学に行けなくなった時、留学に行けるようになった時、留学が実現した時、そして、卒業後の留学に関する意識について調査を行い、その変化についての分析を行った。発表の内容に関して多くの質問やコメントをもらうことができ、留学の意義についてさらに考える機会を得た。

前回のフォーラムでは、日本からの参加が少なく、アメリカの日本語教育関係者が中心だったが、今回は日本からの参加者が増えただけではなく、世界のさまざまな場所で日本語教育にかかわっている人たちが参加していた。留学の醍醐味として留学先の言語を通じて世界のさまざまな地域の人と交流することも挙げられるが、今回のフォーラムは日本語教育をキーワードに多くの日本語教育に携わっている人々と交流することができた。

